

学校にいけない・いけない子をもつ

# 親同士がつながる場

解決できる場ではないけれど、それを目指す一端となることを願って開催しています（事務局）

ー令和3年7月に参加された保護者の声をお届けしますー

子どもさんが不登校になり始めたころの自分自身の言動について、悔やんでいる親御さんもおられます。今もまだ不登校になったハッキリとした理由が分からないままになっていると余計に思えてくるのかも知れません。

その時の自分(親)の対応を思い出すと目もあてられない。  
戻って(子どもと)話さなくていいのかな？やっぱり自分が気になる

この親御さんの思いに対して、一緒に聴いていた方々がそれぞれにやさしく声をかけられました。

「親子ともお互いがそういう気持ちになれた時に、自然とそうなるんじゃないかな。」  
「ふつうの親子関係でも、親が80代になって言えることとかもあると思う。」  
「完璧な親なんていないから、私も振り返ったらあああってことはいっぱいあるよ。」  
「これからの関係の築き方の方が大事じゃないかな。」



「学校の先生は(学校に)来い来い言うが、医者は違う。  
最低家族と会話できているのならそれほど深刻な状態ではないと。」

実際に子どもさんを病院に受診させたことのある親御さんの言葉です。

「病院のテストを受けてホッとする部分もあった。親の方が気分的に楽になる。」  
「本人もずっと病気じゃないかと気になっていたと思うし、ホッとした部分はある」

学校の先生に対する親御さんの言葉はさまざま。

「学校の先生がまったくノータッチ。積極的過ぎるのもどうかなと思うけど、まったく干渉してくれないのも…」  
「毎日電話をくれるから(電話に)出る。誘われて頑張りますと答えてからふさぎ込むことも」

不登校・引きこもり研究者

同朋大学 川乗准教授も参加されましたので、つぎに先生のお話をご紹介します。

お医者さんは「人間」として見ていて、学校は「進路」を見ているんです。つまり見ているものが違うんですよ。私は不登校はあまり扱ってなくて、引きこもりの方が主です。ただ、引きこもりの方々に話をきくと、学齢期に不登校だったという人が圧倒的に多い。日本の制度的な問題ですが、助けてくれと言わないと行政からは助けてくれません。時間がかかったらかかっただけ社会に出るのにも時間がかかります。親はどこまでのスパンで子の面倒をみるのか。その見通しや覚悟も必要になります。これは日本の文化の影響もあります。日本では民法877条にも明記されているように、家族がお互いの面倒をみるという文化があるのです。

また、自立するためには、自分がすべきことがある、つまり「役割」というのが大事になります。だから、家庭の中でも役割があるのは自立に向けてよいことだと思います。それが自己有用感につながっていくからです。

## ◆つながる場の開催について◆

奇数月の第3日曜日

午後1時30分～3時頃

AGALA2階(箕島本町商店街東入口付近)

駐車場有:AGALA東隣

(事務局) 有田市社会福祉協議会(宮本)

TEL 0737-88-2750

mail aridashi.shakyo@gmail.com

お話を聴いていると、本人のペースで向き合うことが大事だと感じるので、無理に学校へ行かせる必要はまったくないと思います。でも、川乗准教授のお話から、長い目で見た時に、子どもさん自身がどこかで社会との接点や自分の生き方を見つめる機会をもち、親もいつまで支えるのか、その見通しをつけるタイミングは必要なのだと思いました。それはきっと参加された親御さんも同じだと思います。

決して焦らず、こういった会で話し合うことで自然と親がさまざまな気づきを得ることも第1歩だと思います。

(事務局)